

## 〔研究ノート〕

## A．グラムシにおけるサバルタン論の生成に関する覚書

松田 博\*

本稿は、グラムシの『獄中ノート』のなかでも後期の「フォルミア特別ノート」シリーズの重要なノートである「サバルタン（従属的社会集団）・ノート」（第25ノート）の諸草稿を、アソシエーション論との関連性において検討することを主題としている。『ノート』研究において、これまでこの「第25ノート」の本格的研究はきわめて不十分である。また「サバルタン研究」の領域においても、この「ノート」の意義は十分注目されてこなかった。グラムシの後期における問題意識の具体的展開の一環としても、また「サバルタン研究」とグラムシとの内在的関連の明確化という点からも、この「サバルタン・ノート」の各草稿の分析は不可欠であり、本稿ではとくにサバルタン論における方法論に関する各草稿を検討対象とした。またこの主題に関する研究動向の検討を通じて今後の基本的研究課題と方向性についての一定の整理を試みた。

キーワード：グラムシ，ヘゲモニー，アソシエーション，サバルタン，市民社会

## 目次

はじめに

1. 「サバルタン」関連草稿の検討（1）
2. 「サバルタン」関連草稿の検討（2）

おわりに

## はじめに

本稿はグラムシ『獄中ノート』後期の一連の「フォルミア特別ノート」のなかの「サバルタン・ノート」（第25ノート，以下Q25と略）におけるサバルタン（従属的社会集団）とアソシエーション論との関連性について，第一次執筆のA草稿および第二次執筆のC草稿とを対比，

分析することを課題とする。アソシエーション論に関しては，すでに別稿で指摘したごとく『獄中ノート』校訂版（以下『ノート』校訂版と略）に基づく本格的検討は開始されたばかりであり<sup>1)</sup>，また「サバルタン・ノート（Q25）」は近年「サバルタン・スタディーズ」（スピヴァク，チャタルジー等）からの重要な問題提起や『ノート』校訂版研究の進展（ブッティジ等<sup>2)</sup>，さらには「校訂版」におけるグラムシ最晩年の執筆である「フォルミア特別ノート」の重要性に関する問題提起（いわゆる新たな「校訂版」分析仮説の提示<sup>3)</sup>など）によって，その内容が注目されている。しかしながらこの両テーマのいずれも，『ノート』旧版（問題別選

\* 立命館大学産業社会学部教授

集)では、諸草稿自体が断片化され、『ノート』原本に即した系統的な編集がなされなかったため(後述するごとく、この両テーマが「忘れられたテーマ」と化していたことは『ノート』旧版を検討すれば歴然としている)、グラムシのこのテーマに関する探究・思索の発酵・生成・展開・成熟を内在的に解明することは不可能であった。この両テーマに関する関心が深まるのは『ノート』原本をほぼ復元した「校訂版」刊行後(1975)のことであり、前者は主として「市民社会」論の文脈(「アソシエーションの体系としての市民社会」)で位置付けられ、後者は前述した「サバルタン・スタディーズ」の発展のなかで注目されるようになった<sup>4)</sup>。この点に関し「校訂版」英語版編者のJ・A・ブッティジジは次のように述べている。「グラムシ研究固有の分野において、『従属者(subalterni)』や『従属性(subalternita)』に関するグラムシの考察は、グラムシ自身が『特別ノート』の一つでこのテーマを取り上げていたにもかかわらず、その研究、分析はきわめて不十分であった。(中略)さらに『従属者(サバルタン)』という用語は、イタリア語版のグラムシ著作集の事項索引にさえ掲載されていないのである<sup>5)</sup>。したがって両テーマの関連性、交錯領域に関する「校訂版」に基づいた研究は、これまで皆無に等しく、それだけにブッティジジやハウク(「校訂版」独語版編者の一人であるが)の問題提起は重要であり、グラムシの最晩年の探究と思索を内在的に解明するためには不可避的なテーマといえよう。

### 1 「サバルタン」関連草稿の検討(1)

すでに言及したごとく「フォルミア特別ノー

ト」シリーズのなかの一冊である「Q 25」は「歴史の周縁にて(従属的社会集団の歴史) Al margini della storia (Storia dei gruppi sociali subalterni)」という表題で、8篇の草稿Cが収録されている。この草稿Cは、主としてQ 3をはじめとする14篇の草稿Aを再編、修正、加筆したものである。とくに本稿の主題との関連では第2および第5草稿が重要な意味をもつので、まず第2草稿から検討しておきたい。

この草稿2 Cは、Q 3の草稿14 Aに大幅な加筆・修正(用語の変更を含む)が加えられた草稿であり、A・C両草稿を対比すればグラムシのこの主題に関する探究の深化が明瞭である。草稿A(Q 3 § 14 A)でグラムシは次のように述べている。

「支配階級の歴史とサバルタン(従属的)諸階級の歴史(storia delle classi subalterne)。サバルタン諸階級の歴史は必然的に断片的(disgregata)かつエピソード的である。これら諸階級の活動には、たとえ一時的なものにせよ統一にむけた傾向が存在するが、それは表面化しない部分であり、勝利を獲得した場合のみ顕在化するものである。サバルタン諸階級は、支配階級のイニシャティブの影響を受けており、それは反乱の場合においても同様である。つまり彼らは不安定な受動的状態にあるのである。したがって自律的イニシアティブのいかなる痕跡もきわめて大きな価値を有する。いずれにせよサバルタン諸階級の歴史にとってはモノグラフがもっとも適した形態といえるが、それは各分野の大量の資料を必要とする<sup>6)</sup>。同草稿に対応する草稿C(Q 25 § 2 C)では、表題も「方法論的諸基準(Criteri metodologici)」と改められ、内容的にもより推敲されている

(下線部は変更ないし加筆された箇所である)。

「方法的諸基準。従属的諸社会集団 (gruppi sociali subalterni) の歴史は必然的に断片的かつエピソード的である。これら諸集団 (questi gruppi) の活動には、たとえ一時的なものにせよ統一にむけた傾向が存在することは疑いないが、この傾向は支配的諸集団 (gruppi dominanti) のイニシアティブによって常に破碎され、したがってこの傾向が明確となるのは一定の歴史の周期が完結した場合、それもこの周期が成功をもって終結した場合のみである。サバルタン諸集団は常に支配的諸集団のイニシアティブの下におかれ、それは反乱や蜂起の場合においても同様である。それゆえ『恒久的』な勝利のみが、それは即刻のものではないが、従属性 (subordinazione) を打破するのである。実際、サバルタン諸集団が勝利しているように見える場合においても、これら諸集団は不安定な受動的状態におかれているにすぎないのである (この真実は、少なくとも1830年までのフランス大革命の歴史によって論証しうる)。それゆえサバルタン諸集団の側からの自律的イニシアティブのいかなる痕跡も、総合的な歴史家 (Lo storico integrale) にとってきわめて大きな価値を有するに違いないだろう。このことから次のことが明らかとなる。つまりこのような歴史はモノグラフによってしか扱えず、またこのようなモノグラフは、しばしば収集することが困難な大量の資料を必要とするということである」<sup>7)</sup>。

この小論の課題は「サバルタン論ノート (Q 25)」の総体的解明ではなく、アソシエーション論との相互関連性の分析にあるので、その視点から同草稿Cにおけるグラムシの強調点を要約すれば、以下の諸点が重要と言えよう。

(1)サバルタン諸集団は、支配的諸集団のヘゲモニー下において受動的かつ従属の状態にある場合はもとより、支配的諸集団からの自律性 (autonomia) の獲得つまり受動性・従属性からの脱却を求めて抵抗、反乱、蜂起する場合においてもなお、支配的諸集団のイニシアティブつまりヘゲモニーの影響から完全に自律的とはいえない。

(2)サバルタン諸集団の自律性を求めるイニシアティブ(つまりカウンター・ヘゲモニー)は、支配的諸集団のヘゲモニーによって絶えず破碎され、持続的かつ有機的なものとならず、断片的・エピソード的なものにならざるを得ない。つまりサバルタン諸集団は、支配的諸集団とは異なり、即自的・自然発生的には自らの系統的な「歴史」をもつことが出来ない。

(3)したがって上述の「断片的・エピソード的」諸要素を、サバルタン諸集団の「自律性」の痕跡(そこには「可能性の契機」もまた含まれる)として位置付け、評価することが重要な意義を有する。それは安丸良夫氏が指摘する「可能意識」の要素ないし領域も含有している<sup>8)</sup>。またそれはサバルタン諸集団の断片化された「痕跡」の発掘・復元という個別具体的なモノグラフ的探究によってしか接近しえない課題である。つまりアプリアリで単線発展的なサバルタン諸集団の「ヴィクトリー・ロード」の物語 (Storia) など成立し得ない領域と言い得る。さらに支配的諸集団の「歴史」のみならずサバルタン諸集団の「自律性」の諸要素をも包含するより総合的な歴史認識の形成にとって、このモノグラフ的探究は不可欠の要素となる。

以上の論点をアソシエーション論との相互関連性の視点から検討すれば次のように言えよう。まず第一に、サバルタン諸集団の自発的ア

ソシエーションにおいても、その当初から十全な自律性が確立されているわけではなく、むしろ支配と従属・指導と同意等の複合的ヘゲモニー関係の下で、支配的諸集団にたいする自立性・自律性のみならず自発的アソシエーション内部においても従属性と自律性の葛藤が生じることは不可避である。つまり支配的諸集団の複合的ヘゲモニー関係の文脈内に位置付けることが不可欠であり、そうでなければサバルタン諸集団の自律化の試行をたえず「断片化」し、その「従属性」を再生産しようとする支配的ヘゲモニーの動態把握が欠落してしまう。またそれはサバルタン諸集団の「自律性」志向の動態的把握（その発酵や高揚のみならず挫折や後退も含めて）も不可能にするであろう。第二に、サバルタン諸集団の自発的アソシエーションの抵抗、反乱、蜂起などの断片的事例のなかに、その従属性と自律性を解明し得る貴重な要素、「痕跡」を見出し得るのであり、したがってサバルタンの「痕跡」は民衆的アソシエーションにとっての重要な「証言」に他ならない<sup>9)</sup>。

グラムシは以上の点に関する重要な探究を同草稿に先行する草稿1Cにおいて行なっている。この草稿自体これまで注目されてこなかったのが不思議なほど、グラムシのサバルタン概念の生成にとって重要な内容の草稿であるがグラムシ研究およびサバルタン研究双方ともこの草稿を検討対象とした研究（文字通り「モノグラフ」的研究であるが）は管見のかぎりでは皆無であり、換言すれば同草稿は「忘れられた草稿」と化してきたと言っても過言ではない。ここではこの小論の主題との関連で、簡潔にその要点に触れておきたい。同草稿は「ダヴィデラザレッティ（Davide Lazzaretti）」という表題をもっているが、グラムシが注目したこのラ

ザレッティ（1834 - 78）は、フィレンツェを中心都市（同市はリソルジメントつまり国家統一後の最初の首都でもあった）とするトスカナ地方の山間部のモンテ・アマータに生まれ、リソルジメント運動参加後次第にサヴォイア王家中心の国家形成やヴァチカン批判の意識を強め、「千年王国」運動の指導者として民衆の広範な支持を集め、1878年「神の共和国」の実現を掲げ蜂起したが、憲兵隊によって射殺された特異な人物である。彼の殺害後、この千年王国運動は表面的には終息するが、民衆意識のなかに「モンテ・アマータのキリスト」としての殉教者にたいする崇拜（ラザレッティ主義）は根強く継承され、それは反ファシズム・レジスタンスの時期まで民衆文化の地下水のごとく続いた。この人物とその運動および蜂起が広く知られるようになったのは、英国の歴史家E. J. ホブズボームによる先駆的研究である『素朴な反逆者たち Primitive Rebels』（1959）においてイタリアにおける千年王国運動の代表的事例の一つとして紹介されて以降のことである。しかしながら英語圏におけるグラムシ研究者としても先駆者であるホブズボームではあるが、グラムシの「サバルタン・ノート（Q25）」にも、とりわけラザレッティに関する草稿1Cにも全く言及していない。おそらくホブズボームが参照した『獄中ノート』旧版（問題別選集）には「Q25」が纏まった形では収録されず、その大半の草稿も「リソルジメント」の巻の「付録」として巻末に置かれるなど「周辺」化され、軽視されたことと無関係ではないだろう<sup>10)</sup>。

この草稿1Cをはじめとするラザレッティに関する各草稿の詳細な分析、検討はグラムシの「サバルタン」概念の生成・発展の内在的解明

にとって、きわめて重要であるが、ここでは要点のみ述べておきたい。つまりグラムシがラザレッチェの思想と行動とりわけ蜂起に至る過程および支配的諸集団（とくにリソルジメント国家とヴァチカン当局）の対応に注目するのは、以下の諸点をグラムシが重視したからに他ならない。またそれはグラムシ自身、獄中で可能なかぎりこの事例に関する「モノグラフ」を検討し、そこから断片化されあるいは抹殺されたサバルタンの「痕跡」を読み取り、さらにその「痕跡」を復元・再生させることによる「総合的」な歴史像形成の追求であり、それ自体「歴史像」をめぐるヘゲモニー闘争の一環であったといっても過言ではない。つまりまず第一には、この事例をはじめとするサバルタン諸集団の抵抗、反乱、蜂起が、エリート層のサバルタンについての表象を露呈する契機となった点をグラムシは重視する。「社会的エリートにとって、サバルタン諸集団の成員（gli elementi）は、つねになんらかの野蛮性や病理性を帯びている」（草稿1C）。つまりそこから導きだされるのは、サバルタン諸集団の抵抗、反乱、蜂起等は、その指導者であれ、その集団であれ、「近代社会」にとり残され、あるいは適応できずに逸脱した野蛮で病理的な人士、群衆という表象である。このような表象が、まさにラザレッチェ蜂起の際の国家やヴァチカンの対応に具体的に示されたごとく、指導者の殺害を含む強制力による制圧や「逸脱者」にたいする規制と排除を正当化する契機となったのである。その意味で、サバルタンとは「歴史」から排除されたばかりでなく、「自己の歴史」を抹殺された人々に他ならない。

第二に、第一の点と関連するが指導者像（この場合ラザレッチェ）の形成におけるメディア

（この場合出版物）の役割への注目である。活字メディアによる「世論」形成にあたって採用された「説明原理」は、民衆の広範な参加をその基盤としなかったリソルジメントと「近代国家」形成（グラムシ的概念では「受動的革命」型の国家）にたいし、イタリア全土で広範な抵抗、反乱、蜂起が頻発するが、それにたいし「このような不満の爆発を示す個々のエピソードにたいし、それを特殊で、個人的な、フォークロア的、病理的等々」のきわめて作為的な要因に帰すというものであった。つまりリソルジメントとそれを起点とするイタリアの「近代化」過程が矛盾に充ちたものであり、かつその深刻な負荷が広範な民衆＝サバルタン層に科せられていることを隠蔽し、「不満の爆発」の諸原因をサバルタン層の偶発的、個人的、病理的要因に矮小化しようとする意図を持ったものであった。

第三に、ラザレッチェ蜂起の際に掲げられた旗は、赤地に「共和制と神の王国」というスローガンが記されていた。つまり未分化な形であれリソルジメントが達成し得なかった「共和制」、民衆参加を意味する「赤旗」、そしてヴァチカンの勅令「ノン・エクスペディット」（1871年の普通選挙参加禁止令）への批判など君主制国家とローマ法王庁にたいする不満・不信が反映されたものであった。またラザレッチェ自身異端審問に問われたこともあった。支配層がこの蜂起についての真相究明を回避し、それを指導者の特異な性格や病理的要因に転嫁しようとしたのは、それが支配集団の政治的かつ精神的ヘゲモニーの根幹を揺るがす可能性をもった蜂起であることを察知したからに他ならなかった<sup>11)</sup>。

## 2 「サバルタン」関連草稿の検討（2）

ここでは前章で検討した草稿2Cのより具体的な展開である「方法的諸基準（*Criteria metodici*）」という表題をもつ草稿5Cを検討したい。長文の草稿なのではじめにその主要部分を以下に要約しておきたい。

(1)指導的諸階級（*classi dirigenti*）の歴史的統一は国家において実現され、指導的諸階級の歴史は本質的には諸国家ないし国家群の歴史である。基本的な歴史的統一とは、具体的には国家あるいは政治社会と「市民社会」との有機的關係の結果である。

(2)サバルタン諸集団は統一されておらず、「国家」に転化しえないかぎりには統一もされ得ない。したがってサバルタン諸集団の歴史は、市民社会の歴史と交錯しており、市民社会の歴史の、また市民社会を媒介とする諸国家と国家群の歴史の「断片的」で非系統的な一函数にすぎない。

(3)サバルタン諸集団の総体的把握にとって以下の諸点が重要である。サバルタン諸集団の経済的、社会的、イデオロギー的、政治的形成過程の解明。同集団と政治的諸組織との具体的な関連性。支配的諸集団がサバルタン諸集団の合意と統制力を維持するための対応（新政党の結成など）。サバルタン諸集団の限定的かつ部分的な要求実現のための独自組織の形成。

既存の枠組みのなかで、サバルタン諸集団の一定の自律性を主張するような新たな組織。総体的な自律性を主張する組織体。

(4)支配的諸集団とサバルタン諸集団の各々の政治的組織化（とりわけ政党）を介しての複合的ヘゲモニー関係とりわけ前者の後者にたいするヘゲモニー行使および後者の自律性獲得過程

それは多様な局面と要因を含む複合的な過程に他ならないが、その総体的認識の必要性。それはイタリアにおける近代国家形成過程における支配的集団およびサバルタン諸集団の動的かつ総体的な認識の必要性と密接に関連している。

(5)とりわけリソルジメント（近代国家形成過程）において「イタリアのブルジョアジー（*borghesia*）は自己の周囲に人民を統一することができず、それが彼らの敗北と発展の挫折の原因であった。リソルジメントにおいてもこのような狭隘なエゴイズムが、フランスのような急速かつ活力に充ちた革命を妨げた。そこに従属的社会諸集団の歴史形成およびまさに諸国家の（過去の）歴史形成にとっての最も重要な問題点と最も深刻な困難の原因のひとつがあるのである」<sup>12)</sup>。

この草稿をアソシエーション論との関連という視点で検討すれば、以下の諸点を指摘することが出来よう。まず第一に、サバルタン諸集団のアソシエーションは「市民社会」の一要素ではあるが、それらのアソシエーションは支配集団のヘゲモニーのもとでは、その「自律性」は抑圧され断片化かつ周辺化されざるをえない。換言すれば、支配と従属、指導と服従の複合的ヘゲモニー関係において、それらのアソシエーション自体がサバルタン化せざるをえない。つまり「市民社会」自体が支配的ヘゲモニーのもとで中立的・自律的領域、次元でない以上、アソシエーションもまた市民社会内で従属性と自律性との不断の緊張関係のなかに組み込まれざるをえない。したがって第二に、サバルタン諸集団のアソシエーションの具体的な実態は、支配集団のヘゲモニーからの政治的、社会的、イデオロギー的な自律性獲得のけっして単線的ではない過程の具体的な指標となる。さらに第三の

点は、イタリア・リソルジメントにおける近代国家形成の歴史的特殊性と密接に関連している。つまりフランス革命のように旧体制、旧社会の深部からの変革が達成されず、したがってフランスのように旧体制下におけるサバルタン諸集団からの新たな指導集団、支配集団（ヘゲモニー集団）への上昇転化や広範な参加が阻害されたイタリアのような国においては（グラムシはQ 25に先行するQ 19のリソルジメント論において「受動的革命」として、その特殊性とくに国民的基盤の狭隘さ、脆弱性の歴史的要因を分析している）、サバルタン諸集団の自律性の獲得過程（したがって断片的かつ周辺的でない「歴史」の獲得過程）は独特の困難性を帯びざるをえない。換言すれば、後者の自律性獲得過程は即自的課題としてだけでなく、前者つまり国家の歴史的・国民的基盤の拡張の課題、さらにはその必然的な系として「アソシエーションの体系」としての「市民社会」の自律的拡充の課題、さらには「政治社会（国家）の市民社会への再吸収」の理論的・実践的展望と緊密に関連しているのである<sup>13)</sup>。

### おわりに

ここではサバルタン論に関する最近の研究動向を反映したV. F. ハウク（「校訂版」独語版編者の一人である）、J. A. ブッティジジ（同じく英語版編者）の見解を検討し、今後より深化されるべき課題を確認しておきたい。

ハウクは、グラムシのアソシエーション論を分析した問題提起的論文のなかで次のように指摘している。「グラムシは諸アソシエーションの問題を、サバルタン性とヘゲモニーとの間の歴史的緊張関係へと、さらに市民社会と狭義の

国家との関係へと移植する。知識人抜きにはヘゲモニーがないように、アソシエーションもまたないのだ。この考えは、マルクスを大きく超え出て、マルクスの思考の空白部へと達している」。筆者もまたグラムシのアソシエーション関連の各草稿の分析から、グラムシにおけるアソシエーション問題が一方では国家（狭義）・市民社会・サバルタンとの関係性という次元において位置付けられるとともに、他方ではヘゲモニー・知識人・サバルタンという領域に組み込まれていくこと、すなわちアソシエーション論の分節化が生じていること、およびそれらがいずれも獄中での探究の中でサバルタン論との関連性という新たな主題を浮上させることを指摘したが、アソシエーション論とサバルタン論との接点の解明という従来必ずしも重視されてこなかった論点の提起という点で、このハウク論文は先駆的意義を有していると言えよう<sup>14)</sup>。

つぎにブッティジジの見解は、グラムシ研究とサバルタン研究との接点の解明という領域における重要な問題提起を含んでいるが、その多岐にわたる論点の全体的検討は別の機会にゆずり、ここでは行論に関係する主要な論点を要約しておきたい。

まず第一に彼が重視するのが次の点である。つまりサバルタン研究が、サバルタンの歴史を「隠蔽し、排除し、抹殺し、周辺化しているヘゲモニーの政治的・文化的作用」の解明を主要課題の一つとしている以上、この点に関するグラムシの一連の草稿の分析と再構成が避けられないが、『ノート』英語版アンソロジーの欠陥、不備もあり「グラムシ思想の緻密で複雑な構成のなかで、彼の従属性（subalternita）についての探究が、国家・市民社会そしてヘゲモニーの分析と絡み合っていること」の問題意識が相

対的に弱い点である。

第二に、グラムシのサバルタン概念の明確化それはグラムシ研究における「サバルタン・ノート（Q25）」の軽視やさらには『ノート』の「編集問題」にも波及する問題性を孕んでいるが、という課題である。つまり端的にいえば、サバルタン概念は、歴史的・文化的な内実のみでなく、「政治的性格」を内包した概念であるという点である。換言すれば、サバルタンの「従属性」の克服過程および「自律性」の獲得過程においては歴史的・文化的契機のみならず政治的契機の探究と明確化が不可欠であるというのが、ブッティジジの強調点といってよい。しかしながら私見では、従来のグラムシ研究における後者の「過剰な」重視と前者の相対的軽視という傾向が、サバルタン研究において、その「反動」として前者の重視、後者の相対的軽視という傾向を生む要因となった点も無視できないので、この点の究明は他日を期したい。

第三には、市民社会（アソシエーションを含む）、ヘゲモニーとサバルタンとの緊密な相互関連性であるが、この点はすでに言及したのでここでは省略する。ただしこの論点はグラムシ研究・サバルタン研究双方の交差領域となる論点であり、とりわけ前者においては「サバルタン・ノート（Q25）」をはじめとする、従来重視されてこなかったサバルタン関連草稿の解明が不可欠であり、それ抜きでは後者との建設的対話の「架橋」は不可能であることを強調しておきたい。ブッティジジの見解ではこの点の位置付けがやや弱いと考える<sup>15)</sup>。

いずれにしてもグラムシ研究における「サバルタン・ノート（Q25）」をはじめとするサバルタン論の本格的探究は、国際的にも端緒的段階にあり、『ノート』校訂版およびその「限界

と問題点」の克服のための『ノート』原本にもとづく研究が求められていると言える。またそれが現代世界のサバルタンの従属性の克服と自律性の獲得過程の解明という鋭い問題意識を有するサバルタン研究との内在的接点の構築の契機の一つとなりうるであろう<sup>16)</sup>。さらに「Q25」の解明は、一連の「フォルミア特別ノート」解読の重要な契機となるばかりでなく、スピヴァク等のサバルタン・スタディーズ（『サヴァルタンは語りうるか？』他）、国際関係論における「ネオ・グラムシアン」アプローチの提唱者であるコックスやギルにおけるグローバルな「反・受動的革命」の展望やネグリ『帝国』におけるマルチチュード的主体、「ポスト・コロナニズム」論や「世界システム論」におけるカウンター・ヘゲモニー論、ホール等のカルチュラル・スタディーズにおける民衆各層における「コモン・センス」「フォークロア」等の文化的アイデンティの問題等の深化、発展にとって一定の積極的寄与となる可能性を内包した「特別ノート」と言えよう。その意味で「サバルタン・ノート」の総合的解明の課題は、後期グラムシ研究の深化のみならず、前述のような諸領域における現代的展開の豊富化にとっても積極的契機となると考えるが、この点の考察は今後の課題としたい。

## 注

- 1) 拙著『グラムシ研究の新展開』、御茶の水書房、2003、第11章および補論<sup>1)</sup>を参照されたい。
- 2) 崎山政毅『サバルタンと歴史』、青土社、2001、序章およびJ.A. Buttigieg, *Sulla categoria gramsciana di «subalterno», Gramsci da un secolo all'altro. Riuniti. 1999, pp27 ~ 38* 参照。なおブッティジジ論文の初出は、*Critica Marxista*, 1998, N.1 であるが、東京グラムシ会

『獄中ノート』研究会の訳が同会の冊子『ノート 25: 歴史の周辺』に収録されている。「ノート 25」の訳とともに参照したが、訳文は同一ではない。

- 3) 前掲拙著, 第1章を参照されたい。
- 4) 崎山前掲書, 序章参照。
- 5) *ibid*, Buttigieg, p28, 前掲冊子, 18ページ。
- 6) Q C, pp299 ~ 300.
- 7) Q C, pp2283 ~ 84.
- 8) 安丸良夫『日本の近代化と民衆思想』, 平凡社, 1999, 423 ~ 425ページおよび同『方法としての思想史』, 校倉書房, 1996, 121ページ参照。
- 9) イタリアの民衆のアソシエーションの歴史的背景については, 共編『アソシエーション革命へ』, 社会評論社, 2003, 所収の拙稿を参照されたい。
- 10) E.J.Hobsbaum, *Social Bandits and Primitive Revels*, Free Press of Glencoe, 1959, Chap. , E. J. ホブズボーム, 水田洋他訳『素朴な反逆者たち』, 社会思想社, 1989, 第4章および伊藤公雄「モンテ・アミアータのキリスト」『日伊文化研究』第35号, 1997, 参照。
- 11) Q C, pp2287 ~ 89.
- 12) Q C, p2289. なお本草稿Cに対応するのは, Q 3 § 90の草稿Aであるが(Q C, pp372 ~ 73), その表題は「従属的諸階級の歴史 *Storia delle classi subalterne*」であり, その論旨は基本的に草稿5 Cと同一である。前述の草稿2 Cは草稿Aに大幅に加筆されており, その意味で草稿A・C間の相異が明白であるが, 草稿5 Cには表題の変更以外に大きな差異は認められない。つまりこのことは「第3ノート」(草稿2 Cに対応する草稿AはQ 3 § 14である)開始時においては, この論題(サバルタン論)の輪郭についての着想であったものが, 「第3ノート」後半において後の「サバルタン・ノート(Q 25)」に集約されるような, 一定の系統的な考察に到達しつつあったことの表れといえよう。換言すれば「Q 8プラン」以前に「サバルタン論」の基本的構想が形成されつつあったことを示しており, 各「特別ノート」の成立過程の面からも興味深

い点である。また本草稿においても用語の変更が認められる。つまり草稿A・Cを対照すれば歴然としているが, 「階級」は多くの場合「集団」に変更されている。これはQ 4以後の諸ノートとくに「Q 8プラン」以降の注目すべき特徴であるが, 固定的かつ本質主義的な「階級還元主義」や「階級決定論」(それは経済還元主義・決定論と結合している)的な用語法をグラムシが意識的に回避したためである。従来, 獄中での検閲のためという形式論的な理由付けがなされてきたが, それならば「第1ノート」から「階級」概念が回避されているはずであり, 「ノート」執筆途中からの用語変更の根拠としては不適切である。この点もまた各「特別ノート」の成立過程の解明にとって重要な要素である。

- 13) 前掲拙著, 第11章を参照されたい。
- 14) 同前, 第11章参照。
- 15) Buttigieg, *ibid*.
- 16) 安丸良夫, タカシ・フジタ二両氏の対談「いま, 民衆を語る視点とは?」, 民衆史とサバルタン研究をつなぐもの(『世界』1999年7月)は民衆運動の独自性や自立性にかかわる視点, 日常意識把握の困難性(グラムシのいうサバルタンの「痕跡」に当たるであろう), さらに「国民国家」に回収されず, むしろ「そこから排除されたもの」への問いが「国民国家の裂け目」を逆照射する可能性をもつ, という視点は, 本稿で検討したグラムシのサバルタン関連草稿の含意と共通しており, 興味深い点である。また崎山政毅, 前掲書の序章は, サバルタン研究の視点からのグラムシ研究にたいする鋭利な問題提起を含んでおり, その各論点の検討はグラムシのサバルタン論の構想, 展開, 射程を『ノート』全体のなかに有機的に位置付けるうえで, 不可欠であろう。筆者もまたその検討を別の機会に行なう予定である。

\* *Quaderni del Carcere*, Edizione Critica. Einaudi. 1975 (『獄中ノート』グラムシ研究所校訂版)はQ Cと略し, 校訂版のページを記した。

## [付記]

すでに前掲拙著第一章で述べたように『獄中ノート』校訂版（V. ジェルラターナ論）は『ノート』原本の復元に近い編集がなされており、その意味で旧版（問題別選集）の「限界と不適切さ」（ジェルラターナ）を基本的に克服した画期的な内容と評価しうる。しかしながら『ノート』の総体的把握のためには、なお検討を要する若干の問題点が残されている。いわゆる「トゥーリ・ノート」（獄中第二期）を重視するあまり、「フォルミア・ノート」（同第三期）を相対的に軽視するような解釈もそのひとつである（前掲第一章参照）。ジェルラターナは、『ノート』校訂版の編者序文（全体として『ノート』の構成、各主題、下史的背景などについて重要な指摘がなされているが）で、一連の「フォルミア・ノート」についてつぎのように述べている。「新たな草稿作成においては、各草稿は、しばしば新たな読書や入手できた新たな資料にもとづく一定の変更を含む推敲がなされるが、それより頻繁に行なわれるのは、単純な機械的転写（*una semplice copiatura meccanica*）のごとき、そのままの転記である。おそらく最も創造的な要素は、それ以前の時期の各ノートに追加された若干の草稿に含まれている」（QC, Prefazione, XXIX, 邦訳大月版第1巻参照、ただし訳文は同一ではない）。この文意では、「フォルミア・ノート」の「創造的要素」は少なく、その大半はすでにそれ以前

に記された各草稿が単純に「機械的転写」された「ノート」という印象が強くなるのは否定しがたいだろう。この見解をさらに単純化して「フォルミア・ノート＝機械的転写説」と一面化するならば、この時期の各「ノート」の独自性は殆んど評価されないことになり、『ノート』の全体像を少なからず歪曲してしまうことにならざるをえないだろう。この点の詳細な検討は別の機会におこないたいが、ジェルラターナ序文の問題点のひとつとして指摘しておきたい。また本稿では、Q25の草稿分析を通じて、それがたんなる「機械的転写」ではないことを明らかにしたが、この点はたんに「機械的転写」説批判というより、グラムシが一連の「フォルミア・ノート」にこめた含意・遺志を明らかにするために、今後とも各草稿の分析を継続する予定である。第二期の「トゥーリ・ノート」重視を第三期の「フォルミア・ノート」の相対的軽視と短絡的に直結する見解ではなく、第二期、第三期の各々の重要性を明らかにし、さらに両者の内在的関連性を各「ノート」に即して解明することが『ノート』全体像の正確な把握のために不可欠であるというのが当面の筆者の「仮説」である。「フォルミア・ノート」の具体的検討なしに、ジェルラターナ序文を自明の前提とするならば、「見てから定義しないで、定義してから見る」（リップマン）というステレオタイプの陥穽におちいるのはさげられないだろう。